

行政視察報告

委員会名	文教委員会
視察日	令和6年5月13日(月)
視察先	長崎県佐世保市
視察委員	池田 ひさよし 委員長 大 高 拓 副委員長 梅沢 とよかず 委員 牛 山 正 委員 細 木 まこと 委員 門 脇 翔 平 委員 三小田 准 一 委員 小 川 ゆうた 委員 みずま 雪 絵 委員

調査項目	英語で交わるまちSASEBOプロジェクトについて
事業概要	多くの外国人が住み、国際色豊かな風土を持つ佐世保市では、その恵まれた環境を生かし、グローバル人材が育つまちを目指して「させぼ暮らし＝英語が身につく」という新しいまちの魅力を創ることを目的に、このプロジェクトに取り組んでいる。
視察内容	(1) 英語で交わるまちSASEBOプロジェクトの目的 ①米海軍基地や多くの外国人が居住し、国際色豊かな風土や文化を持つ市の特長を活用し、国際社会を生き抜くグローバル人材を育成する。 ②官民協働の展開のもと、市全体の英語学習環境の充実を図りながら「佐世保暮らし＝英語が身に付く」という新しいまちの魅力を創出する。 (2) 事業の背景 ①人口減少による経済の変化 ②外国人材の雇用推進 ③英語教育の変化 ・2020年より、小学校英語の教科化と拡充 ・子どもたちの教育環境充実と学力向上の必要性が増大 ・小学校教諭の英語教育スキル習得が必須 (3) 手段 ①子どもたちの異文化理解や英語教育・学習環境の充実を図り、グローバル人材育成の基盤を形成 ②市民の外国文化や外国人に対する親近感と英語に対する関心や学習意欲を喚起 ③市民のライフスタイルやステージ、学習意欲に応じた発展性のある英語学習環境の構築 ④新たな事業・産業の創発、雇用の創出による地域活性化 (4) 構成事業費（令和6年度事業費） ①国際理解・交流能力育成事業（125千円） - 学校教育における「実践の場」を提供 ・Active English Camp 各学校において計画された英語活動等を実施 ・Challenge English Camp ALTが企画・運営する英語活動等を実施 ②教育センター事業（400千円） - 理論、英会話、事業実践の教員自身の「学習の場」 ③英語シャワー事業（8,610千円） - 官民協働の手法を用いて、市民が身近に英語や異文化に触れ、日ごろの学習成果を実践できる環境づくりを行うことで、英語に対する学習意欲の向上及び深い学びへの動機づけに繋げる。 Sasebo Expo、国際交流大運動会、させぼEチャンネル、グローバルキッズ・チャレンジ、English出前プログラム (5) 今後の展望 ・庁内関係各課との連携を拡げ、継続的に取り組むことができるような環境づくり ・少しでも多くの市民が英語に興味を持てるようなイベント、きっかけづくり
主な質疑内容	(問) 小学校の英語授業は何年生から行われているのか。また、どのような内容なのか。 (答) 文部科学省の規定どおり、小学校3・4年生が週に1時間、外国語活動として実施、5・6年生が週に2時間の授業時数となっている。学校によっては、特別のカリキュラムを組んで小学校1年生時から年間5～10時間程度、英語の活動として取り組んでいる。 (問) Active English Campは市内小・中学校のうち、何校が希望しているのか。 (答) 今まで中学校のみの事業であったが、令和6年度から小学校も対象とした。 市内には小学校が分校も含めて68校、中学校が24校、義務教育学校が2校あるが、令和5年度は中学校5校の希望があった。 (問) 実施した学校からの評価はどうだったか。 (答) 教員からはプログラムを組むのが大変であったとの声もあったが、子どもたちが普段の授業とは違った姿勢が見られたなど高評価であった。 (問) 学校教育としての英語の授業と生涯学習としての英語シャワー事業での子どもたちの受けとめ方や教員の指導方法で何か感じることはあるか。 (答) 英語シャワー事業などの社会教育事業に参加した児童・生徒は体験を通して英語を活用することの喜びや有用性を感じており、学校現場でも学習意欲の高まりを感じている。また、教員も研修により授業の改善に取り組んでいる。

行政視察報告

委員会名	文教委員会
視察日	令和6年5月14日(火)
視察先	福岡県北九州市
視察委員	池田 ひさよし 委員長 大 高 拓 副委員長 梅沢 とよかず 委員 牛 山 正 委員 細 木 まこと 委員 門 脇 翔 平 委員 三小田 准 一 委員 小 川 ゆうた 委員 みずま 雪 絵 委員
調査項目	ミクニワールドスタジアム北九州とプロサッカーチームとの連携・協働事業について
事業概要	ミクニワールドスタジアム北九州は、北九州市が「市民に夢と感動を与え、豊かで活力ある北九州市の創出につながる『見るスポーツ』の機会を提供するため、プロアマ問わずサッカーやラグビーなどのレベルの高い試合や大会を中心に開催できる施設」として、北九州市スタジアム整備等PFI事業により整備した球技場で、Jリーグのギラヴァンツ北九州がホームスタジアムとして使用している。
視察内容	(1) スタジアム及び運営の概要 ・名 称 北九州スタジアム ・愛 称 ミクニワールドスタジアム北九州 ・竣 工 ネーミングライツ導入、3年契約 2,200万円/年 平成29年1月 ・事業費 設計・建設費約99億円 管理・運営費15億円（平成29年～令和13年の15年間） 市が年間約1億円を指定管理者へ委託料として支出 ・運 営 指定管理者 ウインドシップ北九州（九電工、日本施設協会、美津濃） J3ギラヴァンツ北九州のホームスタジアム ・収容人数 15,300人 (2) スタジアム整備の経過 ・関係団体からの要望（平成19年） ギラヴァンツ北九州のホームスタジアムであった陸上競技場がJ1規格を満たしていない。アクセスが悪いなど、市サッカー協会等から新スタジアム建設要望 ・市スポーツ振興審議会からの提言（平成20年） 「企業、市民の支援の輪が広がってきており、優先的に整備すべき」 ・2度の公共事業評価を実施（平成23～25年） ・スタジアム整備事業者の決定及び整備着手（平成26年）～完成（平成29年） 我が国初のPFI手法によるスタジアム整備 (3) スタジアム整備のポイント ・みんなが集い、賑わいを生む“海ちか・街なかスタジアム” 海に近く関門海峡を臨む絶好のロケーション ・臨場感あふれる“ダイナミックスタジアム” 客席最前列とタッチラインとの距離が8m、高低差65cm ・環境未来都市にふさわしい“エコスタジアム” 太陽光発電、トイレの雨水利用、高効率LEDナイター照明 (4) 公共施設としての利活用 ・フィールド100日利用計画 事業者からの提案書に基づき、フィールドの利用を70日、フィールド以外を利用を30日、計100日のスタジアム利用を目標としている。 ・スタジアム利用調整における優先順位 ① 市の大規模イベント（ロックフェス等）やサッカー・ラグビーの国際試合 ② ギラヴァンツ北九州公式戦 ③ 市が共催・後援するサッカー・ラグビーの試合やイベント ④ 指定管理者による自主事業 (5) ギラヴァンツ北九州への支援 ・スポーツ振興計画において市のシンボルチームとして位置づけ、市民、企業、行政が一体となって支援 ・アウェイゲームの遠征費、ホームゲームでの会場運営費の一部を支援 令和6年度予算額 3,500万円 ・市民招待観戦事業やスポーツ体験教室の開催 令和6年度予算額 4,050万円 (6) ギラヴァンツ北九州との連携・協働 ・地域交流、小学校訪問、部活動支援、市のPR等
主な質疑内容	(問)スタジアム周辺の騒音問題はあるのか。 (答)サッカーの試合での騒音問題はないが、花火大会や大規模イベントの際に少しある。 (問)ギラヴァンツ北九州のホームゲーム開催による経済効果はあるのか。 (答)アウェイチームサポーターの来場により、交通機関等にかんがりの効果がある。 (問)ギラヴァンツ北九州に対し補助金として直接的な支援を行っているが、北九州市をホームタウンとする他のプロスポーツチーム等にも支援を行っているのか。 (答)他のチームには補助金は交付していないが、市との協働事業等による側面的支援は行っている。

行政視察報告

委員会名	文教委員会
視察日	令和6年5月15日(水)
視察先	福岡県飯塚市
視察委員	池田 ひさよし 委員長 大 高 拓 副委員長 梅沢 とよかず 委員 牛 山 正 委員 細 木 まこと 委員 門 脇 翔 平 委員 三小田 准 一 委員 小 川 ゆうた 委員 みずま 雪 絵 委員
調査項目	小中学校における英語教育・グローバル教育について
事業概要	飯塚市では、未来を担い、世界へはばたく「本物志向・未来志向のひとづくりのために」を教育理念に掲げ、義務教育9年間の連続した学びや育ちを重視し、子どもたちの生きる力を育成するとともに、夢や希望をもって未来を切り拓くキャリア形成を図ることをねらい、連続性のある教育活動を実践している。その取組の中の一つとして、英語教育・グローバル教育に力を入れている。
視察内容	(1) 飯塚市小・中学校外国語教育推進構想（令和6年度） グローバル化に対応した児童生徒の育成 ～英語で基本的なコミュニケーションが可能な人材の育成～ 目標：小学校6年時に英検5級合格レベル、中学校3年時に英検3級合格レベル (2) 外国語教育の充実に向けた取組（令和6年度） ・小学校3・4年生 ALT（外国人講師）の活用 ・小学校5・6年生 英語専科教諭による授業、オンライン英会話を取り入れた授業 ・中学校1～3年生 ALTの活用、オンライン英会話を取り入れた授業 (3) オンライン英会話（平成28年～） ①目的 グローバル化に対応した新たな英語教育の本格展開に向けて各自治体にそのための体制整備が求められる中、「外部人材の活用促進」及び「指導用教材の開発」の観点から、オンラインによるネイティブ講師とのマンツーマンでの英会話レッスンを小学校の授業に導入することで、児童の聞く・話すを中心とした英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。 ②成果 ・オンライン英会話の授業を受け授業を楽しんでいると感じたり、英語で積極的にコミュニケーションをとりたいと感じたりしている児童が増加してきている。 ・来校するALTの方々に対しても、以前より積極的に声をかける姿が見られるようになり、オンライン英会話以外の外国語活動にも意欲的に取り組む児童が増えた。 ③課題（令和5年度） ・回数を重ねるごとにオンライン英会話を楽しみにしている児童が減っている。 ・中学校の英語学習への接続が十分ではない。 ④今後の検討事項（令和5年度） ・回数等の検討 小学校で月2回（年18回程度）実施⇒回数を減らす ・実施方法の検討 現在マンツーマンで実施⇒講師1名に対し児童複数で実施 ・中学校での導入の検討 現在、中学校3校でトライアルを実施⇒中学校でもオンライン英会話を導入
主な質疑内容	(問) オンライン英会話の授業の相手は、パソコンソフトではなく人が応対しているのか。 (答) フィリピンのセブ島に会社があって、常時150人体制でスタンバイしており、同時に3クラスで授業が可能な状態である。 (問) オンライン英会話授業にかかる経費はいかほどか。 (答) 令和5年度の決算見込額は5,700万円。契約方法は1レッスン当たりの単価契約となっている。令和6年度は小学校での回数を減らし、中学校を増やしたが、予算額は7,400万円である。ほとんどが人件費で、円安の影響と物価高により年々増加傾向にあり、課題となっている。また、児童・生徒に対する教育の安定性と事務の効率化を考慮し、今回の業者とは3年間の長期継続契約とした。 (問) 不登校児童・生徒に対してもオンライン英会話授業を実施しているのか。 (答) 現状としては実施していないが、物理的には可能である。相談も受けているので、今後検討していきたい。また、現状でも別室で授業を受けている児童・生徒はいる。 (問) オンライン英会話授業の成績・評価はどのようにしているか。 (答) 児童・生徒が各個人の端末で受講しているため、教師が様子を見れないという難しさがある。オンライン英会話の評価としては、主体的に取り組んでいるかというところをメインに見取っている。また、対応した講師の単位時間ごとの評価は業者からフィードバックされている。